

心理臨床における実習系Web授業づくりの試み

～交流の場の意味～

佐藤 仁美¹⁾

An attempt to create a web-based practical training class for clinical psychology

～ Meaning of the place of exchange ～

Hitomi SATOH

要 旨

本研究は、2020・2021年度学習戦略教育研究所研究課題報告の一環としての報告である。

2020年度は、心理臨床における実習系Web授業づくりを試みた。Web授業を受講した修了生にインタビューをしたところ、「関係構築の仕方」「五感の大切さ」「授業時間に付随する余暇の時間」「時間と空間の持ち方」「チームでの授業づくり」などの課題が見出された。そこで、2021年度は、「安全性を配慮しながらのつながりづくり」の可能性を追究し、Web授業期間に、オンライン交流の場を設けることを試みた。

その結果、新入生の大半が、まだ会えぬ仲間との授業外での交流を求め、授業外で互いを知る会う場を欲していることが分かった。その理由は、授業内容の確認のみならず、体験の共有、分かち合うことで相互理解につなげ、さらに学びを深めていくことにあった。

心理臨床の学びにおいては、知識を得るだけでは足りず、体験の積み重ねと、互いの体験共有が、大切である。また、対面であろうと、オンライン上であろうと、一人一人の臨床的枠組みの意識も重要であると考えられる。それは、Web授業に付随する交流の場でも同様に行うべきであろう。対面においては自然とできていた仲間との交流を、オンライン上でも構築していけるかが、当面の課題である。

ABSTRACT

This study is a part of the report for the 2020/2021 research project of The Research Institute for Learning and Education Strategies.

In 2020, we tried to create a web-based practical training class for clinical psychology. By interviewing the graduates who took the web-based training course, we found that issues such as “how to build relationships,” “importance of the five senses,” “leisure associated with class time,” “how to set up time and space,” and “creating practical training in a team” were important to them. Therefore, in 2021, I pursued the possibility of “creating connections while considering safety” and tried to establish a place for online exchange during the Web class period.

As a result, it was found that most new students are looking for a place to meet each other outside class, seeking out-of-class interaction with friends they have not yet met in person. The reason was not only to confirm the content of the lesson, but also to share the experience, which leads to mutual understanding and deeper learning.

To become competent in clinical psychology, it is not enough to simply gain knowledge; it is important to accumulate experiences and share one's experiences with others. In addition, it is important to be aware of each person's clinical framework, whether face-to-face or online. This should be retained similarly for exchanges that accompany web-based practical training as well.

It was possible to promote exchanges with peers naturally when the classes were conducted face-to-face; the immediate challenge is to develop the same level of exchanges online.

¹⁾ 放送大学准教授 (「心理と教育」コース)

1. はじめに

2020年より猛威を振るい始めた新型コロナウイルス感染症(COVID-19)の影響で、日常生活のみならず、心理臨床の世界にも、様々な影響がもたらされた。日本トラウマティック・ストレス学会災害対応委員会委員長：加藤寛(兵庫県こころのケアセンター)によると、新興感染症が引き起こすメンタルヘルスの影響は、1. 感染リスクおよび感染そのものが引き起こす心理的反応(主に、不安と恐怖)、2. 環境の変化が引き起こす問題、3. 情報が引き起こす問題、の3つに分けて考えると理解しやすいとの指摘がある。日本心理臨床学会第40回大会(2021年9月3日~26日)においても、上記指摘に関連する演題が散見された。大会自体も、2020年に引き続き、コロナ禍のためにWeb開催(期日指定で人数制限のあるZoomによるライブ配信と、人数制限がなく期間中自由に視聴可のオンデマンド配信)となり、高セキュリティ、かつ、厳格なルールの上で開催されながらも、事例検討にかかわる演題は大幅に減少し、その内容も限定され、中には取り下げの動きも見られた。オンライン面接・オンライン授業に関連する演題を拝聴する中、松本(2021)と吉川(2021)のグループ体験報告は、筆者の本学での試みに示唆を与えてくれるものであった。

松本(2021)は、自己の成長(自己理解)と人間関係(他者理解)とを目標としたエンカウンターグループを、オンラインで試み、セッション間に、ブレイクアウトルームの使用を工夫することで、メンバー同士の出会いと相互理解を、対面式と同様に起こせる可能性を提示していた。しかしながら、結果として、量・質ともに体験の個人差が大きく、その理由の一つとして、セッション外の交流が断たれ、より個別化され、体験を共有しにくい状況を報告していた。オンライン上での交流を「電話以上、リアル以下」と表現し、ネット上の限界として、「遠隔同士の状況の違い≠同空気を共有されなさ」「on-offの明確すぎる切れ」「日常との密接感」が挙げられた。

また、吉川(2021)は、新入学生のオンラインでのサポートグループの実践から、対面を経験せずにオンラインのみで始めた学生にとって、「孤立化を防ぐスタートとしての支援の意味」があるものの、「危機管理の難しさ」「同空間共有の限界」「五感の使えなさ」を指摘していた。また、オンラインから対面に切り替えられた際に、オンライン時には、「適度な距離感で、会話」ができていたが、いざ会った時に、何をどう話したらいいのか戸惑い、オンラインを望む学生もあるとの報告もあった。

筆者は、波田野・北原・伊藤とともに、2020年度より、学習教育戦略研究所研究課題「臨床心理士・公認心理師養成における、通信制大学の役割 メディアを介した、学生・教員の双方向の授業体制づくりにむけて」に取り組んできた。2020年度の研究では、対面

式(直接性)と非対面式(間接性)におけるメリットとデメリットを文献研究により導き出し、本学の教育にマッチする同時双方向性Web授業を、実際に、学部・大学院・修了生を対象に行い、アンケートと修了生インタビューにより、検証を行った。その結果、松本(2021)と吉川(2021)の報告にリンクする、「時空の持ち方と遊びの部分」「身体性と五感の体験」「ノンリニアな体験」「安全性を配慮したつながりづくり」「チームとしての設計」という5点が導き出された。

(1) **時空の持ち方と遊びの部分**：対面式の場合、プライベートと学びの間にある、「時間は曖昧に、空間は境目がはっきりしている」ことにに対し、Webでは、「時間がくっきり切られ、空間の境目が曖昧になりがちである」ことが導き出され、時間と空間の境目の持ち方は、あそびの部分、いかにWeb環境(授業)に構築していけるかが課題となった。

(2) **身体性と五感の体験**：つながりという面でも、オンライン上の信頼関係構築と、Web上で繰り返される課題遂行との関係も、状況設定や課題の組み合わせによっても、大きく差が出、従来、直接対面することで、「圧」や「空気感」を感じながら、先達の姿勢を背中から追い、自然と体に染み込ませながら、自身の臨床感を育んでいく心理臨床の世界では、身体性・五感との関連が大きく、視覚と聴覚の利用に限定されるWeb環境で、いかに他の感覚を発揮できるように、あるいは、補完できるように、工夫していくかが課題となった。

(3) **ノンリニアな体験**：リニア的なWeb環境に、機械のメリットと可能性を最大限に活用しながら、心理臨床の世界で展開されるノンリニアをどう構築していけるのかの追究が求められる。現時点で、少しでも多様な感覚を賦活できる方法としては、非常に古典的なことではあるが、教材は印刷して郵送して、紙の材質を感じながら、自身の手を使って、書き込んでいくなどの、身体を使った(触覚的)実習を組みこむことに一つの望みを託していきたい。

(4) **安全性を配慮したつながりづくり**：具体的には、つながりに対して、安全性を配慮しながら、ブレイクアウトルームや、チャットなどを、余暇時間に導入し、仲間同士の関係づくりの機会を設定していくのも、一つの可能性であろう。そのためには、機械仕様についても、教員側も受講生側も、それぞれが努力していく必要がある。これは、心理臨床の歩み寄りの努力にも通じ、一つ一つの操作を含めた動作に、協働を感じられるようなことも、含めていくことも考えられる。その前提には、講師側と受講生側の間に、信頼関係が前提となるため、事前準備をいかに行っていかにもヒントは見つけられそうである。

(5) **チームとしての設計**：臨床心理学は、感じ、考え、相手を思い、といった学問であるゆえ、知識収集だけにとどまらず、その先に踏み込める課題を実践できるようなシステム構築も求められる。機械操作と授業に加え、全体を見渡すには、今回、TA(teaching

assistant) の存在が大きかった。講師が授業をスムーズに進められ、受講生がある程度不自由なく実習できるためには、裏方で TA の支えがあってであり、無くてはならない。実習系 Web 授業を円滑に進めていくには、“チーム”で行うことがベターと考えられる。今後の課題として、TA のあり方、チームとしての Web 実習について、追究していく必要がある。

また、筆者担当の院生たちからも、Web でのオリエンテーション (2021 年 5 月 10 日) 以降、数回のオンライン修論指導ゼミにおいて、同期と直接会うこともできず、画面上でしか相手に会えていないことへの不安や物足りなさ、何を頼りにしていいのかも不透明で、自信がない状態が感じられ、少しでも、院生同士、院生と教員がふれあえる機会をもてることで、心理臨床の醍醐味を感じて頂き、歩みへの一歩につなげていきたいと思った。

2021 年度は、上記の内、(1)「遊びの部分の導入」と、(4)「安全性を配慮しながらのつながりづくり」に焦点をあて、研究を行うこととした。2020 年度においても、大学院臨床心理学プログラムの 2 月面接授業『臨床心理基礎実習』時に、Zoom にて授業を展開する中、昼休み時間を院生に開放し、自由に交流の場を設けておいたが、利用者 (参加・発言) はごく一部であった。また、同時並行して、大山の発案で、Padlet (ひとつの画面に複数人が文字入力・写真貼り付けのできるオンライン上で使えるツール。容易にシェアができ、グループワーク等に最適) を用いた Web 掲示板の試みも行われたが、投稿者は限定的で、利用者は一部であった。

今回の試みも、一部の利用者となる可能性も高いと予想されたが、利用者・非利用者の双方から、「安全性を配慮しながらのつながりづくり」の可能性を試みることとした。

2. 研究概要

【方法】

Web 面接授業『臨床心理基礎実習』開始の前日夕方、および期間中授業後の夕方以降の時間帯に、教員も適宜参加しての院生同士が自由に交流できる時間を Zoom 上に設けた。管理者は筆者が行い、参加可能な教員の数名に、共同ホストとしての参加を依頼した。授業開始 2 週間ほど前に、「交流会」企画を、授業資料とともに書面にて郵送するとともに、Google Classroom にてアナウンスした。交流の機会は 3 回、1 回 60 分を基本とし、授業前日は、ウォーミングアップを兼ねて、プレセッションとして 30 分ほどのミニ・アート体験 (日常使いのアート体験) を加え、必要に応じ、ブレイクアウトルームも開き、小グループでの交流も可能とした。また、夕食時間とも重なるため、飲食も自由とした。交流会への院生の参加は自由 (任意) であり、不参加であっても、全く成績等に影響しないことを予め伝えておいた。交流会のスケジュール

は、以下である。

日時：2021 年 8 月 23 日 (月) 17:30~19:00
8 月 24 日 (火) 18:30~19:30
8 月 27 日 (金) 18:30~19:30

授業期間終了後 Google form にて、2020 年 8 月 27 日~9 月 4 日の期間にアンケートを設定し、意見・感想を求めた。アンケートは参加者も不参加者も回答できる項目を設け、回答に関しては、任意とし、参加有無と同様に、回答しなくても、全く成績等に影響のないことを伝えておいた。

プレセッションに設定した「日常使いのアート体験」とは、家庭にあるもので、20 分ほどで簡単にできる技法で、今回は、3 色の水性サインペンで折りたたんだティッシュを染める「ティッシュ・アート」(栗本、2020) を行った。「五感」と「安全なつながり」を大切にするため、筆者自ら、水性ペン 3 色を幅広く混色できるように、色合いと濃さを考慮して組み合わせ、染色用ティッシュは、すぐに染められるように折りたたんで準備して、封筒に入れて各人に郵送した (図 1)。



図 1 ティッシュ・アート素材 (左) と完成品 (右) の例

プレセッションは、「普段使い」⇔「だれでも身の回りのもので用意でき、気軽に簡単で失敗の少ない」体験を皆で行い、その体験を分かち合いながら、近況報告に繋げ、語りを促すことを目的とした。院王たちは、まだ知り合うこともままならず初回 Web 面接授業の 5 月から 3 か月以上間のあいた状態で授業に入るため、Zoom・PC 操作確認から、誰かと話すウォーミングアップとして等、多機能のねらいもあった。

3. 結果と考察

Google form によるアンケートは、授業出席者 31 名全員が回答し、回答率 100% であった。

【参加状況】

3 日間の「交流会」参加者は、修士 1 年全 31 名中 26 名、5 名が不参加であった。参加者 26 名中 11 名が全日

程参加、23日と24日の2日参加は0名、23日と27日の2日参加は2名、24日と27日の2日参加は8名、23日のみ参加は3名、24日のみ参加は1名、27日のみ参加は1名であった(表1・図2)。クラスの3分の1が、交流会全日程に参加し、交流機会を求める意識が高かった。

表1 参加状況

日程	参加							不参加
	全日	8/23・24	8/23・27	8/24・27	8/23	8/24	8/27	無
人数	11	0	2	8	3	1	1	5

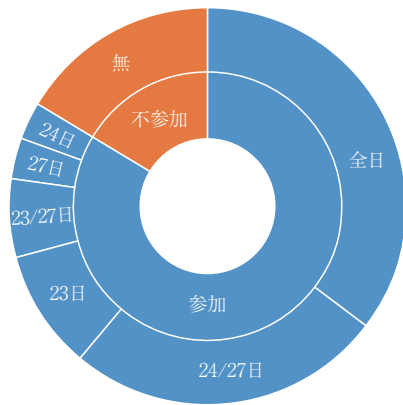


図2 参加状況

【参加内訳・部屋割・ブレイクアウトルーム】

参加者の参加状況は、授業前日16名、内プレセッションのみ2名、授業期間内8月24日参加は20名、内交流会のみは7名、アート体験を含めた参加は13名、8月27日は22名であった(表2・図3)。

初回8月23日は、ブレイクアウトルームは設けず、1つの場での全員での交流の場となった。

第2回目8月24日は、交流会のみの予定であったが、初回8月23日に、参加希望ながら仕事等で参加できずにいた院生たちより、アート体験の希望が多かったことに加え、前日に体験した者の中にも、再度の体験リクエストがあったため、交流のみを希望する者と、アート体験も希望する者とのニーズに分け、ブレイクアウトルームの2種機能を設けることとなった。メインルームではアート体験付き交流、2つのブレイクアウトルームには各々教員が1名入り、交流のみ希望者用に設定し、院生は話してみたい教員のルームに自由に入出りできるようにした。交流のみ希望者は、最初から自由に希望ブレイクアウトルームに入り、アート体験希望者は、最初20分程度でアート体験を行った残り時間を、ブレイクアウトルームに移動し、他の教員と院生たちと交流していく者も多かった。中には、体験後もそのままメインルームに残り、そのまま交流する者もあった。

第3回目8月27日は、教員参加率が高く、院生の慣

れもあり、言語のみの交流がスムーズとなり、ブレイクアウトルーム数を増やして対応した。試みとして、院生のみでの交流の場としてのブレイクアウトルームを設け、教員1名ずつのルームを3つ、教員複数名の部屋を1つ(メインルーム)、院生のみ用を2つ、計6か所の交流の場を設けた。教員により、ルームの運営は異なり、自由に発言しあう、一人ずつ近況を話す、教員に質問してディスカッションする、飲み物片手にくつろぐ、等さまざまであった。院生用2ルームの内、1ルームは使用されず、5ルームが活用された。ブレイクアウトルーム利用に関し、表3・図4に記

表2 参加内訳

日程	授業前日			授業期間内			全日程
	8月23日			8月24日		8月23日	8月23・24・27日
	プレ&交流会	プレのみ	交流会のみ	交流会&art	交流会のみ	交流会	不参加
人数	14	2	0	13	7	22	5
	16			20		22	5

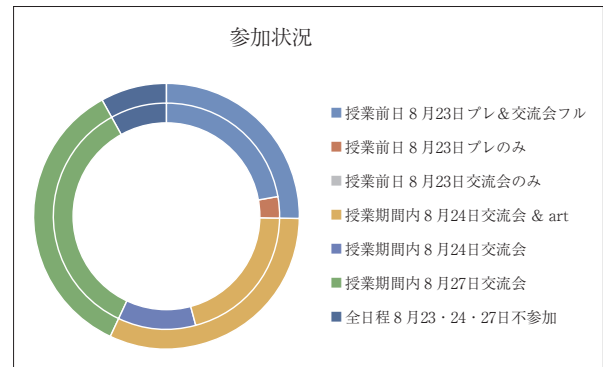


図3 参加内訳

表3 参加ブレイクアウトルーム

部屋	教員A	教員B	教員C	院生	メイン(複数教員)
8/24	9	5	—	—	7
8/27	5	3	8	4	6

※数字は参加人数。—は設定なし。

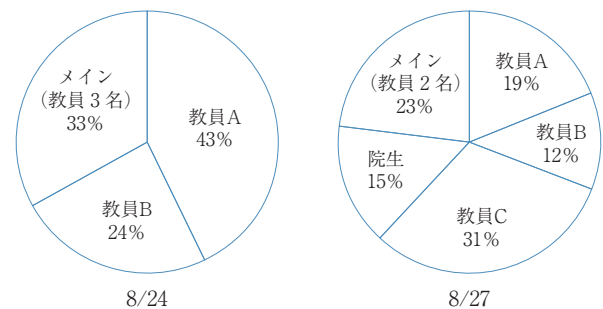


図4 参加ブレイクアウトルーム

す。ブレイクアウトルーム利用に関しては、院生の意識として、基本に「その教員と話してみたかった」動機があり、内訳として「授業を受けて、その授業の講師と授業枠外でも話してみたかった」、「ゼミ以外の教員と話してみたかった」というものであった。

院生は、回を重ねる毎に、Web環境と話すことに慣れ、くつろぎながら、その場に、各々身の置き方を

見出していった印象である。

【満足度】

参加者には満足度、不参加者には参加したかった度を求めたところ、およそ80%の参加満足度、参加したかった度が得られた。参加したかった度は、授業前日に高%を示した。しかしながら、中には、交流機会を

表 4-1 満足度

満足度		%	100	95	90	85	80	75	70	60	50	40	30	20	10	0
授業前日	8月23日	ブレ&交流会	3		3	1	3	1	1		1					
		ブレのみ					2									
		交流会のみ														1
授業期間内	8月24日	交流会	5		3		7		2		1			1	1	
	8月27日	交流会	3	3	2	2	4	2		1						

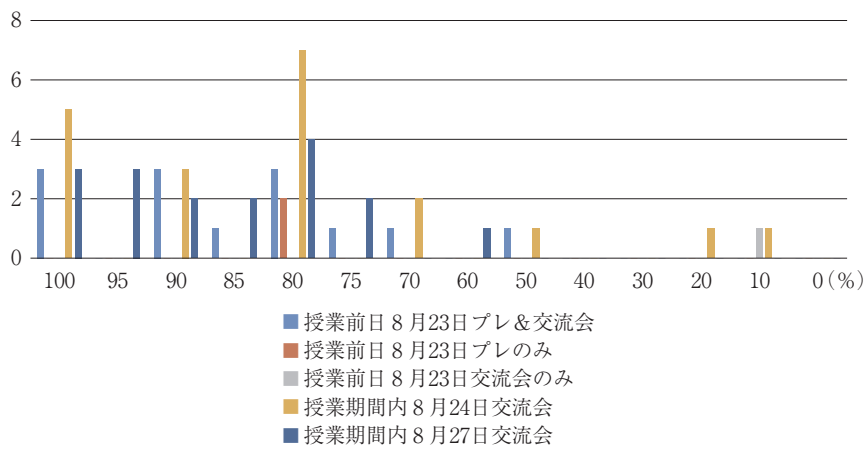


図 5-1 満足度

表 4-2 参加したかった度

参加したかった度		%	100	95	90	85	80	75	70	60	50	40	30	20	10	0
授業前日	8月23日	ブレ&交流会	3	1	2		2	1		1	1		1			
		ブレのみ	4		1		1	1		1	1					
		交流会のみ	4		1			1		1	1					1
授業期間内	8月24日	交流会	1		1		2			1	1					
	8月27日	交流会	1		1		1			1				1		

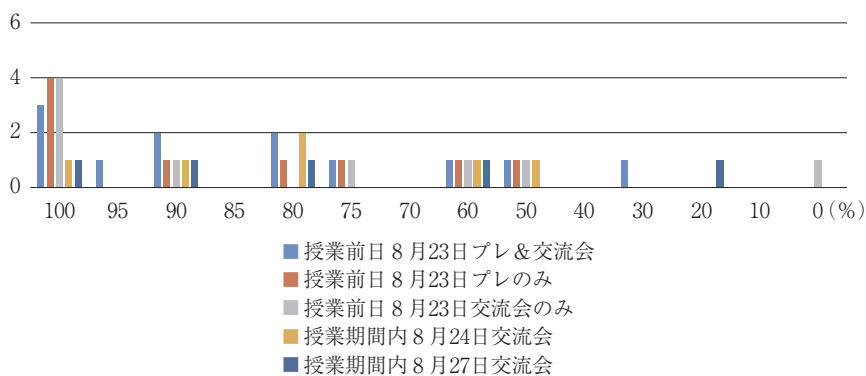


図 5-2 参加したかった度

必要としない存在もある（表4・図5）。

仕事や家庭の事情等で参加ができなかった者の参加したかた度は、特に授業前日に高%を示したが、院生への案内が、開催前2週間ほどであったために、スケジュール調整が困難であった者も少なくなく、開催者側の反省点である。しかしながら、参加希望が高いという事実は、それだけニーズが高く、授業前のウォーミングアップ的に位置付けられよう。2020年度に行った修了生のインタビューより、従来の対面開催の場合、院生たちは、前日よりセミナーハウスに宿泊し、授業初日を迎える者が多いが、不安を抱えながらセミナーハウスに到着すると、そこで、仲間に会え、その晩は、ともに飲食し、近況を語り合い、翌日からの授業に、ともに頑張ろうと語り合うことで、安心して授業に臨んでいたことが明確になっている。今回の前日交流会は、安心して授業に臨むための助走のような役割を担えそうである。

【満足度とブレイクアウトルームから】

ブレイクアウトルームを利用した交流の場として、院生が、「教員と話してみたい」根底には、授業を受けた後の、教員に対する興味・教員という枠を超

えての人間性への興味も含まれているようである。ゼミ生と指導教員は、2年間、修論指導を通して、学問を柱として、人間性のぶつかり合う場でもあるため、幸にも不幸にも、互いを、ある程度深く知ることとなる。Web上であっても、定期的に会うことになり、ふれあう機会は、対面と変わりはない。しかしながら、通信制である環境に加え、We授業に切り替わることにより、更に担当教員やゼミ生以外との接点はなくなるため、交流会のような機会を、意識して作らない限り、ふれあうこともなく修了時を迎える可能性もある。

【開催日程】

交流会を行う際の日程に関し、授業前日の開催には約60%、授業期間内の開催には約70%の希望があった（図6・7）。中には、仕事や家庭等の事情により、朝・昼などの時間帯希望もある。対面授業では、会場に集まり、余暇を含めた面接授業日程を、自らのために使えることに対し、Web開催の場合には、授業外の時間は、日常と連続したプライベート空間にあることから、余暇の時間を作り出す難しさが明確となった。

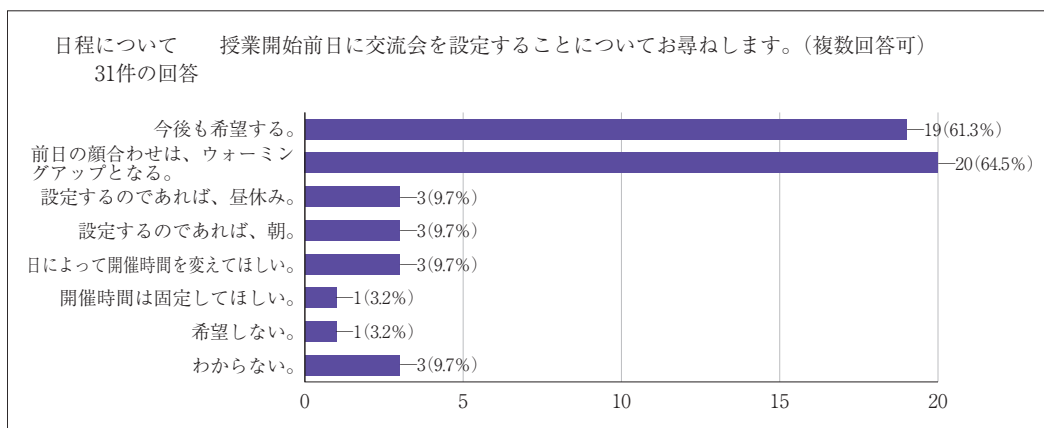


図6 開催日程（今後の希望）Google form アンケートより

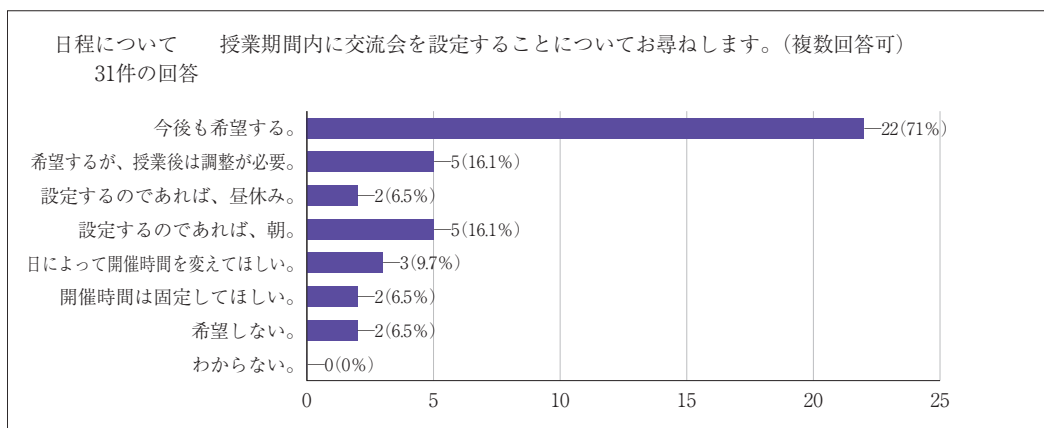


図7 開催日程（設定時間）Google form アンケートより

【開催希望】

今後もオンライン授業が続く場合、授業期間中に87.1%が交流会を希望し、授業のない期間でも、58.1%が希望していた（図8・9）。授業開始前日の開催には、ウォーミングアップ的期待度が高かった。開催を希望する中で、授業後の夕方から夜の時間を希望する者が多かったが、授業時間外の調整が難しく、朝や昼休み等を希望する者もあった。また、開催時間の設定に関し、時間固定を希望する者もあれば、固定するのではなく、日によって開催時間を変えてほしい希望もあった。これらも、日常との連続性の影響が大きい。

交流会前半に行ったアート体験等の機会は、今後もWeb授業開催になった場合、希望が77.4%、授業期間外でも希望が50%あった（図10・11）。

オプションとして、今後、体験会があった場合のリクエストとして、14件の回答が得られ、大別すると、授業関連・修論・新たな技法取得・交流会に分けられた。授業関連として、復習の機会・補講・授業後に湧き上がる疑問等についての質疑応答を求める回答とともに、授業で取り上げた査定の実習を、対面で行う希望も見られた。修論関係では、ゼミ以外の仲間からの意見を求めたい希望があった。

新たな技法取得に関しては、授業内に教員が副次的テーマに取り上げた技法や、普段使いから臨床への応用へと、幅の広い技法を知りたいといった意見があった。また、実際に自らが何かをアクションを起こして体験するというだけでなく、交流の機会を通して、授業では取り上げられない教員の体験談や、研究などを聴く機会も求められ、広範囲の「語り合い」「ふれあい」としての交流会を求める気持ちが多かった。

本プログラムでは、年間5・8・2月に1週間ずつの面接授業の設定があるが、院生たちにとって、授業間の期間が長く、少人数であっても、面接授業間に会える機会を欲していることもあげられた。はざまの期間は、ゼミが開催されなければ、誰とも会えない、ある意味孤独な時間を過ごすことになる。オンラインであっても、学び続ける気持ちを支え、エンパワメントし合える意味で、会えることの意味は大きそうである。

【全体の感想から】

交流会への参加に関しては、集団が苦手で、必要性を感じない不参加者もいるが、参加者の大半は、楽しめていた印象である。交流会参加の困難さを感じる者

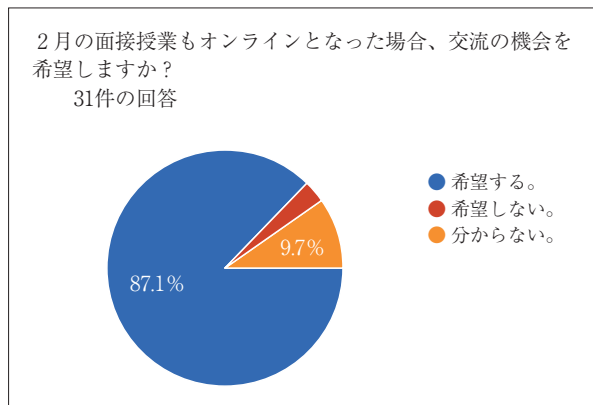


図8 今後の開催希望（授業期間） Google form アンケートより

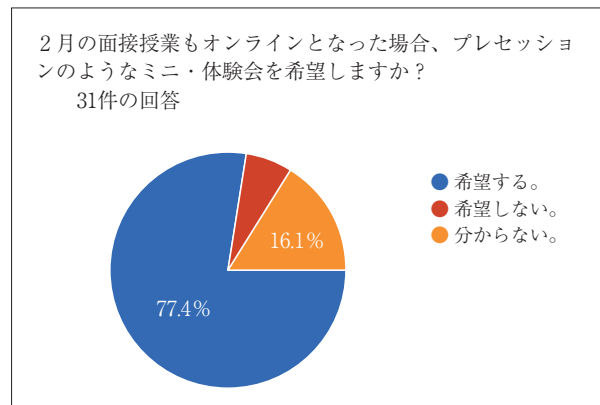


図10 ミニ体験希望（授業期間） Google form アンケートより

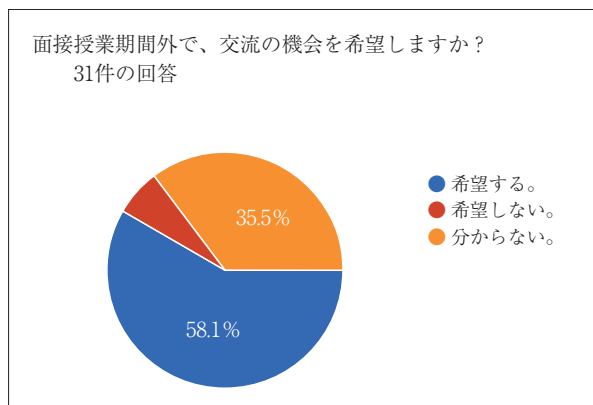


図9 今後の開催希望（授業期間外） Google form アンケートより

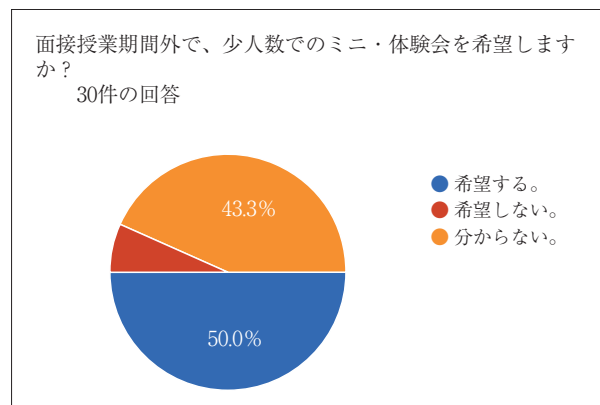


図11 ミニ体験希望（授業期間外） Google form アンケートより

の意見としては、「自宅から参加となるため、授業後は家事等がある」「授業後に仕事がある」理由があり、「昼休みや授業開始前の時間帯の方が都合つきやすい」との解決策も寄せられた。

一方、オンライン上であることを理由として「直接交流ができないのであれば、やらない方がよい」意見もあった。それは、「Zoomの難しいところとして、人数が多いと話す人が限られてしまうことと、話すタイミングが難しいところとを感じる」「Zoomによる交流はないよりはあった方がよいと思うが、Zoomだからこそその難しさや危険性のようなものもあると感じる」「家等で参加になるため、逆に時間調整しづらい」「集合住宅のため、ネット環境も個人では設定に限界を感じた」などがあった。

また、対面授業において院生同士が自然と交流できる状況と比較し、Web上の今回のような交流の場を「与えられた場」「講義の延長」と感じ「リモートの宿命」とまとめ、「改めて対面授業のかけがえのなさ」を謳っていた。

開催時間に関しては、提出課題や翌日以降の授業のことを考慮すると、時間帯や開催時間は妥当であるという意見が多い中、授業開始前日に設定する場合、仕事上がりの遅めの時間を希望する声が複数あった。また、対面授業が行えず、Web授業となる場合、30分でも交流の時間を設けてほしい、たとえば、昼休み等の時間を利用しての交流の場を求める意見があった。今回は、授業期間前から半ば過ぎまでの設定であったが、最終日の設定を希望する声もあった。と同時に、授業期間内であっても、ハードスケジュールの授業後・内の設定は、疲労のために、十分参加できないという者もいた。

交流会に参加することにより、そこで話したことで、仲間同士「知り合い」「距離が縮まり」「授業が受けやすくなり」「授業内のグループセッションでの発言がしやすくなり」「発言が活発になり」「励みになった」という感想が多かった。今回は、3回の設定であったが、回を追うごとに打ち解けて、対面と遜色なく楽しめた報告もあった。3回目のブレイクアウトルームでの交流では、アルコールも入り、宴会状態まで発展できたルームもあった。

ブレイクアウトルームに関しては、「教員の部屋をノックして入室するイメージ」で、教員研究室を訪ねて少人数で話せる機会をもてたようであった。一方、教員の部屋イメージが強く、一度入ると他のルームに移るのは難しい感覚も少なくなく、時間で区切って別のルームへ移動する機会を設定してほしいというリクエストもあった。教員とも、同期とも触れ合える機会であるので、ブレイクアウトルームを自由に出入りできる日と教員のルームを時間で区切って全部回れる日があってほしいとの希望もあった。また、交流会の時間設定をもう少し長くするか、希望者は二次会のような設定を設けるなどの提案もあった。教員と院生同士の交流のバランスは、個人差があるものの、それぞれ

が目的に応じての参加をしていたようだ。今回、活用の有無にかかわらず、院生のみ活用できるフリーの部屋が好評であった。

ブレイクアウトルームの人数として、「6～7人以上だと話せない、話しにくい」「2～4人ぐらいが話しやすい」との感想だった。「最初は少し多めの人数で、慣れてきたら、人数を少なくする、あるいは、最初に少人数で、なれてきたら人数を増やす」、または、「3～4名という人数枠を固定して、メンバーを入れ替えて、総当たりの機会を作り、全員と話せるように工夫する」アイデアも寄せられた。

交流会の入口として、それほど知り合っていない、距離のある者同士の場合、「アート等のような企画」、今回のような「ミニ体験会」により、「共通の話題ができて会話がしやすくなる」意見も寄せられた。設定は、授業前を望むものが多かった。授業前の参加が叶わなかった者には、「もう少し早めに知っていれば日程の調整がついた」コメントがあり、教員主催で行う場合、早めの通知の必要性があった。

【プレセッション（ティッシュ・アート）の感想】

回答者31名全員からの回答が得られた。不参加者の未体験による共通した「わからない」回答に対し、参加者の回答は、共通して楽しい体験であった。

授業前日に設定した交流会冒頭に行ったプレセッションであるミニ・アート体験は、「場が温まる」「授業に馴染みやすくなる」「ウォーミングアップとなる」「他者と話すきっかけ作り」「アイスブレイクの」「会話が弾む」等『場づくり』的に本題である授業に入る前の心の準備としての役割をはたしていたようである。

こうしたアートを介在とした交流の機会は、1つのものを皆で共有し、シェアすることに敷居を低くし、話題づくりとなり、同期の話を聴いて、その後の話せるきっかけづくりへとつなげられるメリットが見出せた。授業前のウォーミングアップとして、十分機能を果たせたといえよう。

用いたティッシュ・アートは、「思いがけないものが出来る」ことで、正解のない、失敗の少ない土壤で、アート等への苦手意識をある程度脱ぎ去り、フランクに共有でき、楽しんで、他者に触れ合えることを可能とした。

日常の身の回りにあるティッシュが材料となり、気軽に、短時間で楽しめ、日常使いから臨床現場にも安心して応用できる、「手元に残る思い出作り」「簡単できれいな出来栄のアート」であり、「広く活用」できるという感想が多かった。「日常への応用」として、気軽さ・応用が利き、広く活用がキーワードとなる。

水性ペンで、折りたたんだティッシュを染める作業は、まず、インクのにじみに集中し、楽しみ、中には疲れを癒し、ティッシュを開いたときの感動を体験し、達成感を得ることができる。失敗が少ないという点で、ウォーミングアップには適するであろう。「楽

しさ」「上手下手を気にせず身近なもので楽しめる」「じっと向き合う・待つ・驚きをとまなう発見」「美しさ・心動かされる体験」「些細なことでも、気づき楽しめるものの必要性」がキーワードとなった。

4. 総合考察

今回の試みは、2年間をともに切磋琢磨していく院生同士、院生と教員の関係づくりのきっかけづくりとして位置付けていた。対面であれば、教員の介入なくとも、院生同士の絆がスムーズに出来上がるが、三密を避ける結果、オンライン上での、空間にも時間にも切断される状況下で、初動において、安全性第一を念頭に、教員サイドから、つながりづくりのきっかけを提供したに過ぎない。当たり前前にできていたことが、当たり前前にできなくなってしまった状況下においても、大切なことは、つなぎ・つながり続けることであろう。十分とは言えないながらも、切断された時空をつなげる一助となればという思いは、院生各人に、様々な形で伝わった感触を持つ。

筆者が心がけたことは、緊張をほぐし、安心して授業に臨める環境を整えることだった。感染症拡大の中のスタートとなり、情報の限られた中で、同期や教員との出会いを迎えた後、オンラインでのやり取りには、信頼関係を構築するために、かなりの努力と歩み寄りが必要となる。この点、心理現場において、見ず知らずのセラピストのところに相談に訪れるクライアントの不安・期待が重なった。筆者の心理臨床現場での経験より、柔らかな出会いを行う際には、手軽で失敗の少ないアートを用いてきた。そこで、本研究の導入にも、応用することにした。言語のみに頼らない、同一課題の体験をともにし、共有することが、ある程度身体性をともなう交流に繋がらせたと感じた。

プレセッションに設定した「日常使いのアート体験」は、アンケート自由記述・感想コメントから、何もなく、集まって話す緊張感を、簡単なアート体験を通して、同じ素材を体験することで、まず、1人作業で自分と向き合うことで、緊張をほぐし、心を解き放ち、癒され、その後その体験を他者とシェアすることで、自身を保障されると同時に、他者の世界に触れ、世界が広がる体験となった。授業前のウォーミングアップとして、「日常使い」であることに、意味がある。Web授業は、そのほとんどが、自宅など、プライベート空間からの受講となり、感想からもあるように、自宅だからこそその受講しにくさがある。対面であれば、講義室に出向き、プライベートと切り離して切り替えができるが、オンラインでは、授業が終わった瞬間、現実の生活が始まる。いきなり授業から始まるには、そのギャップが大きいことから、まず、日常に近いものでウォーミングアップすることにより、徐々に、授業体制を作る必要が感じられ、今回の試みに至った。生活の場であるプライベート空間としての日常に、授業という非日常空間を設置し、また、その切り

替えと、つながりを持つ意味で、自身の身の置き方を考えている第一歩としての「日常使い」のアート体験を導入した。実際、切り替えは難しいものと感じている。ならば、つながりをつけながらの、その意味を問う方が、心理臨床における、日常一非日常を考える学びにもなると考えた。

アートセラピーも、元来、美術・芸術の技法を取り入れていることから、芸術か、芸術療法か、の問いは常に存在する。技巧・精緻さを求めるのではなく、個々人の表現は、中井（1970）のいうところの哲学的等価に帰する。さらに、心理臨床の場では、守られた相談室空間を飛び出し、クライアントのフィールドでの臨床展開も多い。その際に、セラピスト自身が枠を構築し、自らが臨床枠となることが求められる。こういった、日常に近い条件下に臨床家として枠組みを構築することは、オンライン上における、家庭などプライベート空間に自らのフィールドを構築することと酷似していないだろうか。筆者自身、全面的に、オンラインにおける臨床活動を受け入れているわけではないが、臨床姿勢トレーニングの場としての活用も視野に入れようとシフトチェンジを試みている。

そこで、わずかであっても、対面に近い条件を整えようと、資料等は、Web上にアップするのではなく、紙媒体での郵送を基本としている。

本研究においても、素材を通した触れ合いを有効に機能させるために、素材は、授業資料とともに郵送した。施行者が準備した素材をセットして郵送することは、一つの枠づけとなる。そして、実際に、素材に触れる・体験することをともにし、五感への刺激を促すと同時に、ともに経験をすることにより、仲間意識を構築していく。ここには、対面で行うはずであった芸術療法実習の中で、オンラインでも可能な技法を用い、授業補完の意味も含まれる。今回は、知り合う目的での交流が主となるため、アートに関し、セラピーのみならず、レクや関係づくりにも使える応用の高いものを選択した。いわゆる、時間と空間を超えての、五感や身体性を感じられる関係づくりの土台作りを行ったことになる。

今回の、授業開始前日に設定したプレセッション：ミニ・アート体験を含む授業期間内の交流の機会は、Webで行う場合、空間的課題を乗り越え、全国に居住する院生同士、楽しみながらつながれるツールであるメリットとともに、日常との連続性の観点から、交流会などで他者と触れ合う事は、一種、家に他者を招くような、互いにプライベート空間にバーチャル的に入り込む感覚に近づくようで、交流自体にもハードルの高さもあるようである。2020年度の修了生のいくつかのコメントからも、コロナ禍の応急処置的なつながり構築に、時空を超えたWebでのつながりが寄与する面とともに、常に日常の世界が伴う環境にあって、個としての特別なつながり・交流する意味、深いやり取りの成立しにくさという指摘があり、交流の機会においても、参加者の背景を、ある程度把握したうえ

で、ニーズと、関係性構築の段階：深さ・広さに応じての開催のあり方を検討する必要性がある。今後の課題としたい。

本来、院生は、院生同士のつながりに委ねたいところではあるが、オンライン上の交流会開催に関しては、危険性と安全性の観点から、教員側の管理の問題も関与する。院生の自由意思で行う交流会では、気兼ねなく、仲間同士の交流を深められるであろうが、今回のアンケートからも、全員が交流を求めているわけでもなく、集団を苦手とし、希望しない者も存在する。また、交流の場は必要ないと思いつつも、教員主催ということから、自分だけ参加しないことも不安を感じ、参加している例もあった。その点では、参加者の印象として、このような交流の場は、「与えられた場」「講義の延長のよう」という感は否めない。対面であれば、教員を介さなくとも、自然発生的に院生同士の交流が生じ、仲間意識も構築されていく。

オンラインによる画面上での交流は、対面に比べて、相手の状態をとらえきれない部分が多い。五感のうち、視覚と聴覚のみが頼りで、実際の空気感を感じることはハードルが高い。個々人の価値観の違いもあることから、画面上では、共有がどこまで可能なのか、不透明な部分も多い。小さなすれ違いが、そのまま進行されることによって、大きく発展して、取り返しがつかないことになる可能性も拭い去れない。そのためにも、客観的に全体を見通す力が求められる。ホストである教員一人では、見落とししてしまう可能性が少なくなく、複数でのホスト、TAなどを活用したチームでの運営が必要と考えられる。五感が十分に発揮されない分、実動として、複数の目と耳があることが必要であろう。そういった意味では、教員の目は、院生にとっての「与えられた場」として存在するが、ある意味、疑似面接空間にてセラピストという保護空間に守られてのクライアント体験をすることは、一つの心理臨床の実体験を通しての学びとなることを提案したい。

「交流会」を持つ意味として、今回の交流会は、臨床心理学プログラム全教員が、授業担当でなくとも、可能な日に1日以上参加できたことで、ゼミ生以外の院生と教員とも話せる機会が持てた。従来の対面でのオリエンテーションが開催されていたなら、全教員・全同期生と、同じ場で、同時間に出会うことが可能である。2021年度もすべてオンライン開催であったため、一同介すことは、画面上においてのみだった。それも、画面上には、ギャラリービューであっても、スペックにより、人数が限られ、また、皆同じ並びとは限らない。また、対面であれば、余暇時間を利用して交流の機会はあるものの、オンラインでは、ホストが閉じれば、そこで、ぷつと切られる状態になり、関係が途切れ、意識して場を設けない限り、切断された関係はつなぎ留められない。その意味でも、今回の試みは、教員―院生が互いに歩み寄る機会となり、信頼関係構築の一助となれたのではなかろうか。信頼感の

構築は、心理臨床場面に必須であり、日常生活においても同様である。

「参加」に関し、グループセラピーや、芸術療法の基本としているところの「拒む者には無理強いしない」姿勢も取り入れ、交流会参加は任意とし、参加しないことも当然のことと受けとめている。教員主催の安全枠・保護枠のつもりが、中井（1974）の「枠付け」による起こりうる「自由と制限の窮屈さ」の両面が見えた機会でもあった。自由と制限のせめぎあいは、心理臨床の現場であっても、教育の現場であっても、さらに日常・社会においても、少なからず存在する。そのなかで、我々は出会い、知り合い、行動をとりにしている。対面では、自然と行っていた出会いも、オンライン生活になり、その機会も深まりも減少にあるなか、意識して、安全配慮のもとに、つながり続ける必要がある。出会いとは、物理的な現象のみならず、見えない部分での心のつながりとしての意味も大きい。

院生教育のなかで、とくに、心理臨床においては、人（のこころ）を対象とする援助職であるため、どんな形であれ、出会いは必須であり、それなしに始まらない。臨床における人を育てるという事は、出会いの機会も育む必要性を、今回の研究を通して、改めて考えさせられた。そういった意味で、心理臨床において大切にしている「枠づけ」「構造」は、余暇として位置付けられる交流の場でも、半公式・半非公式として、必要に感じられた。

はじまりは、教員主導の、初動としての「枠組み」を提示することで、節度を持った≒安全配慮となる、教員から離れた部分でのつながりを院生に期待する。仲間同士の「枠組み」と「つながり」を、各々の現場での応用につなげてほしいと願う。

5. おわりに

本研究の目的として、「安全性を配慮しながらのつながりづくり」の可能性を追究し、Web授業期間に、オンライン交流の場を設けることを試みることにあった。研究を通して、院生同士、院生と教員のみならず、この試みを通して、教員同士のつながりの強化にもつながったように感じている。

2022年度春より、同時双方向型Web授業が、本格的に本学の授業形態の1つとして誕生する。心理臨床の世界では、まだまだ、対面授業でしか伝えることができない大切なことが多々ある。しかしながら、不測の事態に備え、そのような状況下であっても、なお、学生に学びを提供できるよう、最大の努力を続けていく必要がある。今後も、五感の共有・安全面を配慮しての相互交流と関係性構築に寄与すべく、問い続けていきたい。

謝辞

本研究に惜しめない協力をしてくださった先生方と臨床心理学プログラム第20期生の皆様、修了生有志の皆様に、心より感謝申し上げます。

文献

- 栗本美百合 (2020) ならやま公開講座 (オンライン研修) 教育相談で活用できるアート活動を通じた面接技法を学ぶ 奈良教育大学次世代教員養成センター主催 (第1回2020年10月17日)
- 松本剛 (2021) 話題提供「エンカウンターグループ」 自主シンポジウム68「対面グループとオンライングルー

プーメリットとデメリットを考える」 日本心理臨床学会第40回大会

中井久夫 (1970) 精神分裂病者の精神療法における描画の使用—とくに技法の開発によって作られた知見について— 芸術療法 2、78

中井久夫 (1974) 枠づけ法覚え書 芸術療法 5、15-19

吉川麻衣子 (2021) 話題提供「県外出身新入学生のオンラインでのサポートグループ」 自主シンポジウム68「対面グループとオンライングループ—メリットとデメリットを考える—」 日本心理臨床学会第40回大会

<https://www.jstss.org/ptsd/covid-19/page01.html>
20210610access

(2021年11月1日受理)